

やぶれ傘



二二二号
一九二二年八月

人蔘の花のあたりをとほりけり	櫻橋宏次
梅雨ぐもり真上の空にまるい穴	大島英昭
上曜日の美容院出てまだ西日	きくちきんえ
草矢打ち飽きて川面に石を打つ	青谷小枝
中州まで蓮の浮葉は途切れなく	江入保 殿
外出を控へて妻と心太	廣瀬雅男
バゴタから眞の女の僧が縁蔭へ	藤井美晴
噴水のライトアップが消えにけり	瀧島酒堂
夏の午後ひんやりとするふくらはぎ	小山よる
沖繩総伯父の名のある慰霊塔	天野美登里
自衛官募集の掲示アカンサス	渡邊孝彦
柿若葉おはじきひとつ弾け跳び	有賀昌子
青梅の尻を敷へてをりにけり	白石正彰
やうやくに陽の沈みゆく蟻の道	秋山信行
柳のこゑ考へごとの隙間へと	安藤久美子

抄 集 句 傘 紀 大 輪

桜の実科字博物館の前	浅輪 肇
朝もぎの胡瓜ちくりとたなごころ	泉 一 九
見上げれば流れる雲とむむの花	奥田温子
走り茶を仏前で汲む側静か	亀岡勝子
梅雨に入る居間に明るき花を透け	木村瑞枝
西日中部電大きくカーブして	倉澤節子
レジ脇の子ヨコひとつ買ふ梅雨暗間	榮崎和男
ソーダ水街行く人の見ゆる席	森崎 均
お早うときれいな声の夏はじめ	眞井照子
放水の黒四ダムに駆たてり	野口希代志
一札して投了告げる夏夕べ	広瀬 清
梅雨晴の空に雑雲二つ三つ	笠田健夫
噴水の水ことごとく水に落ち	武藤節子
薄曇光ゆつくりまほす万華鏡	森 美佐子
夏草に押し当ててある鳩の腹	山本久枝

牛 蛙

大崎紀夫

端つこの線路で貨車が灼けてゐる
日かみなり蛇口に口を寄せをれば
かやつり草ちぎればぽつと雨がきて
沼に雨雨の向うに牛蛙
揺れやむと思へば吹かれさるをがせ

雨垂れの近くにじつとあめんぼう
雷が去つて雀が庭にゐて
日は真上帚木まるくただまるく
一日を干されて蛸が暮れてゆく
ざりがにの真つ赤な脚が土管より
アパートの向うで油蟬が鳴く
ぺちやんこの座布団夏の炉を囲み

人参の花

根橋宏次

田んぼはまだ明るいうちに洗鯉
 栈橋の白く塗り直されて夏
 南風吹く丸太の転を船滑り
 伸び過ぎの草を見てゐる夕端居
 礎をゆくほどに茅の輪の匂ひくる
 次の葉につかまり直す糸とんぼ
 その辺をすこし歩いてかき氷
 萍の天水桶をあふれをり
 発掘の現場に灼けて猫車
 人参の花のあたりをとほりけり

芹の花

大島英昭

人参の花咲き雲が五つ六つ
 どこからか旋盤の音麦の秋
 雨傘も薔薇も乾いてゆく途中
 うしろから不意に自転車小判草
 芹の花ぽつりと首にきたやうな
 梅雨ぐもり真上の空にまるい穴
 四葩見てゐる遮断機の上がるまで
 炎天に赤信号が点滅す
 炎昼の犬に見られてとほりけり
 捕虫網振つてお別れ雲白し

西 日

きくちきみえ

金網の向かうは線路夏の蝶
十葉に明るいう雨の降り来たる
蚊柱の夕日の中に現るる
藪つ蚊が向かひの人に寄る気配
ガガンボの人により来て叩かるる
初蟬の鴉よくゐる辺りより
土曜日の美容院出てまだ西日
明け方の電線に鳴く夏燕
降りさうな雲より暗き夏の川
超高層ビルの真横の夏の月

アイスティー

青谷小枝

いはたばこはけの小径のいつも濡れ
木苺の熟れて貝塚てふ窪地
草矢打ち飽きて川面に石を打つ
平日の昼を釣りやりエゴ咲いて
小流れを跳べば片白草に触れ
アガパンサス咲いてしばらく曇りがち
効き甘きクーラーサンバ低くかけ
下駄履いて手の窪に摘むミニトマト
登山小屋盥にあける米二合
アイスティー角のパン屋のイトイン

風鈴

丑久保勲

車窓より植田の先の遠筑波山
暮鳴きしあたりまで来てみたのだが
五重塔を下に見る坂夏鶯
かきつばた上賀茂局ではがき出す
菜園にひとが来てゐる梅雨晴間
風鈴がちんと鳴りたるお昼時
浮世絵の額並びゐる夏館
中州まで蓮の浮葉は途切れなく
サングラスの知人に軽く会釈され
よく撓る奈良団扇とふ古団扇

心太

廣瀬雅男

あやめ咲き猫は尻尾を立てて行く
大股に歩く神主椎の花
どくだみに何か隠れてゐるやうな
支へ木の高さまぢまぢ胡瓜咲く
枇杷熟る昔農家の屋敷跡
街川の暮色の空を蚊喰鳥
ほととぎす丸太二本の橋渡る
月見草引つ込み線に貨車動く
外出を控へて妻と心太
箱庭の水車音無く廻りをり

緑 蔭

藤井美晴

茨 咲 く 門 に DENTAL CLINIC
パゴダから黄の衣の僧が緑蔭へ
梅雨の雨窓のよごれを手でぬぐひ
だしぬけに大雨が来るジギタリス
夏落葉ながるる影を水底に
枇杷熟れてゐる街川の向う岸
青胡桃ビニール傘に日が透けて
このへんの道ばた半夏生草ばかり
夕焼け雲外階段が錆びてゐる
白い雲いちじくの実の熟れかけて

噴 水

瀬島酒望

蘇芳咲く辺り日の差す小屋時
梅雨晴れ間酒蔵で酒粕を買ふ
城跡に泰山木が咲いてゐる
天守前過ぎて実梅の坂くだる
遠目にも栗咲いてゐるのが見えて
三猿を刻む石塚瑠璃蜥蜴
四葩咲く庭より入りて地酒蔵
噴水のライトアップが消えにけり
アーケードより炎天へチンドン屋
三つほど幹に瘤あり百日紅

夏の午後

小山よる

団子虫夏の庭へとほつぽられ
籐椅子に犬の眠つてゐる日暮
髪洗ふことに前頭葉辺り
ガレージの外の明るさ燕の子
葎簾を二束抱へ帰りけり
水色の車が停まる夏燕
カーテンを開ければ夏の真つ昼間
みんなの鳴く樹の下で野菜市
夏の午後ひんやりとするふくらはぎ
パトカーが給油してゐる日の盛

沖縄忌

天野美登里

バス停をはるか眼下に五月山
沖縄忌伯父の名のある慰霊塔
夕暮れの風は峠へ岩煙草
水の音とぎれとぎれに蚩狩
ひと叢の青鬼灯に通る雨
しめりたる朝の魚板や寺は夏
車椅子押しゆく歩道蟬時雨
電球のあかり窓辺の守宮にも
滴りと朝のひかりを手に受くる
きりぎしにひかる十字架土用波

梅雨の昼

渡邊孝彦

せせらぎの堰落ちる音しやが咲けり
バス停が映る植田の濁り水
青梅雨の磴を一気に上りきり
屑籠にメモ書き探す梅雨の昼
閉ざされしままの石橋苔の花
チエンソーの音きこえる梅雨曇り
蟻が行く蔓のからまるレンガ塀
自衛官募集の掲示アカンサス
ペランダの避難はしごがまづ灼けて
児が空へ振りかざしたる捕虫網

柿若葉

有賀昌子

麦の秋棒一本が日時計に
木下闇こはごは草を踏みてゆく
柿若葉おはじきひとつ弾け跳び
花菖蒲八つ橋沈むかもしれぬ
青芝にサッカーボールぽつねんと
手に載せて翳してトマト買ふ少女
夕立来て回送バスが空で過ぐ
回廊をゆく人影のあり涼し
青葉風焼きたてパンの匂ひして
花芽つけしままの初なり胡瓜挽ぐ

青梅

白石正躬

カサカサに麦うれてゐる日暮れ時
夕薄暑土手歩く人近づき来
青梅の尻を数へてをりにけり
山風に暮るる色あり山法師
つかの間の川の上なる梅雨の月
夏の朝土手から川を見て帰る
船で帰る埼玉の人西日中
じやがいも掘る午後の晴れ間のいつ時を
胡瓜もぐズボンがぬれて手が濡れて
向う岸にグライダー五機梅雨晴間

蟻の道

秋山信行

やうやくに陽の沈みゆく蟻の道
ベランダにコシヤツ干されトマト熟れ
声明の途切れ途切れに苔の花
鯖船の差しし潮分けてゆく朝
玉葱の抜かれしままに放られて
をちこちに実梅おちゐる不動堂
いつとききの雨のあがりて青葉風
中天に陽の差しかかる蟻地獄
自転車の轍に蚯蚓ひからびて
雨くるか額紫陽花は風に揺れ

◇9月・10月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
9月	1日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン2	井久保 勲
	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山 信行
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島美穂
	18日(水)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	24日(金)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	25日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
10月	1日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	1日(金)	PM6:00	なごみ会	武蔵浦和コミセン	秋山 信行
	4日(月)	PM6:00	ぎんなん会	武蔵浦和コミセン	井久保 勲
	5日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	5日(火)	PM6:00	うらら会	武蔵浦和コミセン	大島美穂
	16日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	17日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	井久保 勲
	23日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	23日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

[注] 9月の「楽天」は24日(金)に変更します。

10月の「なごみ会」「ぎんなん会」「うらら会」は武蔵浦和コミセンです。

10月17日(日)の吟行。集合 10時。JR北浦和駅

吟行地 さいたま市・見沼

句会場 未定キャンセル待ち

キャンセルが出なかったら午前中散策して解散。

俳句は後で井久保へ送る。

◎連絡先 秋山 信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0412-55-2733
 大島美穂 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 井久保 勲 ☎048-853-3856

朝顔の鉢をずらりと角の花舗
 街路樹はさるすべりのみゆさゆさと
 蟬のこゑ考へごととの隙間へと
 蚊遣香廊下けぶらせ尽きにけり
 打水の後の静けさ真昼今
 石垣に触れて見上げる雲の峰
 石庭の半分は陰夏座敷
 首を振るひとりの為の扇風機
 梅雨の川越ゆる電車の軋む音
 止まぬ雨定家かづらの絡む柵

朝顔

安藤久美子